

# 臨地実習指導者が認識した倫理的課題

Awareness of Ethical Problems Among Clinical Practice Instructors

漆野 裕子<sup>1)</sup> \*

Yuko Urushino

キーワード 臨地実習指導者, 倫理的課題, 臨地実習

Key Words clinical practice instructor, ethical problems, clinical training

## 抄 録

**目的** 臨地実習指導上で臨地実習指導者がどのような倫理的課題を認識しているのかを明らかにする。

**方法** 臨地実習指導者10名に「実習指導場面で倫理的に迷った経験や疑問に感じたこと」について半構造化インタビューを実施し、質的帰納的に分析した。

**結果** 臨地実習指導者が認識している倫理的課題は、【指導者の患者・家族と学生の間での配慮】【学生に経験をさせたいが患者に負担をかけていること】【患者と学生両者への配慮】【実習指導場面の現実と理想との乖離】【指導者として求められている役割が十分果たせていないこと】【患者を尊重できていない学生中心の実習態度】【学生として真摯に取り組めていない言動】【患者との間で生じた学生のつらい経験】【学生の衝撃的な経験とその対応】【スタッフによっては学生が尊重されていないこと】【学生実習に対して指導者としてはスタッフに気を遣うこと】【教員との意思疎通が不十分】【他職種の誠実さが言動】の категорияで構成された。

**考察** 臨地実習指導者は、実習目的と実際が合わない現状で学生と受け持ち患者の間で揺れ動く気持ちがあることや、モデルとなる看護師であらねばならないという理想通りにはいかない現実に倫理的課題を感じていることが明らかになった。

## Abstract

**Purpose** This study aimed to clarify the types of ethical problems clinical practice instructors are aware of in the course of their instruction.

**Method** Semi-structured interviews were conducted with 10 clinical practice instructors, regarding ethical uncertainties and dilemmas they experience during their their instruction. Data were analyzed using a qualitative induction approach.

**Results** Ethical issues that clinical practice instructors were aware of were categorized as “instructors’ consideration of patients, families, and students,” “placing a burden on patients for the sake of building student experience,” “consideration of both patient and student needs,” “deviation of current conditions from the ideal for clinical practice instruction,” “inability to sufficiently fulfill the role expected of an instructor,” “student-centered clinical practice attitude that does not sufficiently respect patient needs,” “student behaviors that show students do not take practice seriously,” “students’ painful experiences with patients,” “shocking experiences for students and their handling,” “staff members’ insufficient respect for student needs,” “being careful around staff due to the role as a clinical practice instructor,” “insufficient communication with faculty members,” and “lack of sincerity in the behaviors of staff in other professions.”

**Conclusions** Results showed that clinical practice instructors faced difficulties balancing the needs of students and the patients receiving them in clinical practice, which did not match the training goals. They also felt that meeting the expectation of being a role model for an ideal nurse was an ethical issue because clinical practice does not always go as planned.

1) 聖泉大学看護学部看護学科 School of Nursing, Seisen University

\* E-Mail urushi-y@seien.ac.jp

## I. 諸言

臨地実習は、患者との関わりを通して看護を考え実践力を培う、学生にとって貴重な機会である。限られた実習時間の中で1人ひとりの学生が学習目標を達成するために、臨地実習指導者の担う役割は大きい。臨地実習指導者は効果的な指導をするために多くの悩みや困難を抱えていることは、細田、山口(2004)や、石崎、池田(2007)などの先行研究でも明らかにされ、いかに臨地実習指導者を支援する体制づくりをしていくべきかという検討等がなされている。学生が臨地実習において患者や家族にとって必要な看護の一部を提供する際、学生の存在が患者や家族の不利益になることがないように看護の質を保証し、患者も学生も安全・安楽であるように支援する役割が臨地実習指導者にはある。臨地実習指導者は、学生がよりよい学びを得られるように支援する存在であるとともに、看護専門職者として「看護者の倫理綱領」(日本看護協会, 2003)や看護の倫理原則(フライ, ジョンストン, 2010)にある「善行と無害」「正義」「自律」「誠実」「忠誠」に基づいた看護実践を行い、患者を擁護し最善のケアを受けてもらう責務を担っている。また、臨地実習指導者以外のスタッフとの業務調整や臨地実習への協力依頼、各養成機関の教育方針に基づいて計画されるそれぞれの実習目的と実習内容に沿った役割が求められ、養成機関ごとに異なった指導体制の中で教員と協働して実習指導を行う役割がある。患者や学生との間を取り持つ臨地実習指導者の倫理的課題は、実習に関わる複雑な関係性の中で実習指導者に特徴的に生じると考える。中村、志自岐(2006)は、「倫理的課題を含む現象には、異なる価値が潜在しており、複雑な人間関係が存在する。ゆえに倫理的課題は熟考を要する課題であると言える。」と述べている。臨地実習指導の場では、複雑な相互関係の中で臨地実習指導者自身が倫理的課題に遭遇する場面は数多くあると考えられる。植村ら(2016)が行った、2005年から2014年の日本の看護学実習における看護倫理に関する文献検討では、教員・指導者の指導の実際についての研究内容が4件であったことを明らかにしている。そのうち臨地実習指導者に関わる研究は2件のみであり、これらは、いずれも臨地実習場面で学生に対しての倫理に関する教育や認識の現状の検討で

あった。また、臨地実習における倫理的課題に関する先行文献では、看護大学生が捉えた倫理的課題に関する研究(岩崎、梶谷, 2019)や、老年看護学実習における倫理的課題に関する研究(小野ら, 2005)など、看護学生を対象にした研究であり、臨地実習指導者自身が認識した臨地実習場面における倫理的課題についての研究は見当たらなかった。教育的役割と看護者としての役割の両方を担っている臨地実習指導者は、複雑な倫理的課題に直面していると考えられ、臨地実習指導の場面での倫理的課題を知り、今後倫理教育のあり方を考えていくことは重要であると考えられる。本研究では、臨地実習指導上で臨地実習指導者がどのような倫理的課題を認識しているのかを明らかにすることを目的とした。

### 用語の操作的定義

「臨地実習指導者」とは、看護基礎教育の臨地実習施設に勤務し、所属病院の病院長または看護部責任者より任命された臨地実習指導を担当する看護師・助産師とする。

「倫理」とは、どのような行為が正しいかを示し、内的な自律から生じるものとする(日本看護協会, 2003)。

「倫理的課題」とは、臨地実習指導者が臨地実習指導上で自分の正しいと思うことと異なり迷いを感じ、課題と認識したこととする。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的帰納的研究

### 2. 研究協力者のリクルート

A 県内300床以上の病院9施設の臨地実習指導者を対象とした。施設の看護基礎教育の看護部責任者に研究の趣旨を口頭と文書で説明し、実習指導者が集まる機会の情報提供を受け、提供を受けた場で研究協力依頼を行った。臨地実習指導者が集まる時等に研究協力依頼ができるよう、直接口頭と文書で依頼した。研究協力の承諾が得られた6つの臨地実習施設で臨地実習指導者に任命されている者10名とした。

### 3. 調査期間

2016年6月～7月

### 4. 調査方法

インタビューガイドによる半構造化インタビューとし、事前に予備調査を実施後、インタビュー内容の妥当性を検討し、修正した。インタビュー研究協力の意思がある臨地実習指導者に対し、半構造化インタビューを30分～45分実施した。同意が得られた場合には、インタビュー内容をICレコーダーに録音した。基本的属性は、インタビュー時に質問紙で回答を得た。インタビュー内容は、「実習指導場面で倫理的に迷った経験や疑問に感じたこと」について自由に語ってもらった。

### 5. 分析方法

得られたデータを全て逐語録として起こした。逐語録を精読し、倫理的課題の経験や認識に関する内容を文脈単位で抽出し、コードとした。コードの内容を比較し、その類似性からサブカテゴリーを抽出、サブカテゴリーを比較し、カテゴリーを抽出した。さらにカテゴリーを、倫理的課題が生じた状況と人との関連性から、患者と学生間で生じる倫理的課題、実習指導者自身に関する倫理的課題、学生に関する倫理的課題、スタッフとの関係における倫理的課題、教員、他職種との間での倫理的課題に分類した。分析過程は複数の指導教員と内容の一致が図れるまで繰り返し行い、

分析の真偽性を確保するよう努めた。

### 6. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究への参加は任意であり、参加に同意しないことをもって不利益な対応を受けないこと、参加に同意した場合であっても、不利益を受けることなくこれを撤回できることを説明した。研究対象者は、この内容を理解した上で研究に参加することに同意する場合は、自らの自由意思に基づき、同意書に署名または記名・捺印して提出してもらった。逐語録データは、オフラインのPCのみで操作を行い、暗証番号の使用と鍵のかかる保管庫で厳重に管理し、本研究以外には使用しないことを説明した。研究終了後、逐語録データは速やかに消去することを説明した。聖泉大学大学院看護学研究科教授会倫理委員会の承認を受け実施した（承認番号015-018, 承認日2016年4月25日）。

## Ⅲ. 研究結果

### 1. 研究対象者の概要（表1）

研究協力が得られた10名を研究対象者とした。研究対象者は男性1名、女性9名であった。臨床経験年数は平均15.5年（8～23年）、実習指導経験年数は平均4.3年（1～10年）であった。10名全員が臨地実習指導者研修受講修了者であった。現在の職位は、主任2名、副主任4名、スタッフ4名であった。

表1 研究対象者の概要

	年齢	性別	臨床経験年数	実習指導経験年数	臨地実習指導者研修受講の有無	現在の職位	所属施設
A	40歳代	女	23年	6年	有	スタッフ	K
B	30歳代	女	17年	7年	有	主任	K
C	40歳代	女	16年	2年	有	副主任	L
D	30歳代	男	12年	1年	有	副主任	L
E	30歳代	女	12年	1年	有	副主任	L
F	30歳代	女	13年	2年	有	副主任	L
G	30歳代	女	12年	3年	有	スタッフ	M
H	40歳代	女	21年	6年	有	スタッフ	N
I	40歳代	女	21年	10年	有	主任	O
J	30歳代	女	8年	5年	有	スタッフ	P

## 2. 臨地実習指導者が臨地実習指導の場面で経験した倫理的課題 (表2)

臨地実習指導者が認識している倫理的課題は、219コード、52サブカテゴリー、13のカテゴリーが抽出された。文中のカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〔 〕, コードは〈 〉で示す。

### 1) 患者と学生の間での倫理的課題

患者と学生の間での倫理的課題は、【指導者の患者・家族と学生の間での配慮】【学生に経験をさせたいが患者に負担をかけていること】【患者と学生両者への配慮】の3つのカテゴリーで構成された。【学生に経験をさせたいが患者に負担をかけていること】の〔学生のケアが患者に負担になっている〕では、〈学生が患者がしんどそうでも話を聞き続けたりケアをし続ける〉など、患者に負担をかけている現状が語られた。その中でも、〔できるだけ学生がケアできるようにしている〕のように〈学生がケアを考えて来ているので、時間がかかってもそこは患者さんにごめんなさいと思う〉など、学生が経験できるように指導者として配慮している経験が語られた。【患者と学生両者への配慮】の〔患者と学生との両者への対応の悩み〕では、患者と学生に同時に配慮しなければいけないという経験が語られた。〔学生の計画通りにいかない〕では、〈せっかく学生が計画を立てているが患者にとったら清拭よりシャワーに入れた方がいい〉のように、実習がいつも計画通りに実施出来るわけではない現状が語られた。また、〔必要時以外の学生の訪室を断られる〕では、〈血圧は測りにきていいが合間は学生の訪室を控えてほしいという患者もいる〉経験が語られた。このような場合に、患者の希望を最優先することが前提であるが学生にも達成すべき実習目標もあるため、どのように進めていくべきかと悩んだ経験が語られた。

### 2) 臨地実習指導者自身に関する倫理的課題

臨地実習指導者自身に関する倫理的課題は、【実習指導場面の現実と理想との乖離】【指導者として求められている役割が十分果たせていないこと】の2つのカテゴリーで構成された。【実習指導場面の現実と理想との乖離】の〔指導者として裏表があることへの葛藤〕では、〈たまに横着していることがあるので指導者としてそういうのは学生に見せられない〉と感じたり、〈指導のときは学生にだめと言いながら自分はして裏表

があると感じる〉と理想と実際の実習指導場面での自分の行動についての倫理的課題が語られた。また、〔指導者の自信のなさ〕では、〈指導者の看護を学生に押し付けていると感じることがある〉という経験が語られた。【指導者として求められている役割が十分果たせていないこと】では〔指導が適時に行えなかった〕や〔指導が行き届かない〕等、臨地実習指導者としての役割が十分果たせていないことについて悩む経験が語られた。

### 3) 学生に関する倫理的課題

学生に関する倫理的課題は、【患者を尊重できていない学生中心の実習態度】【学生として真摯に取り組めていない言動】【患者との間で生じた学生のつらい経験】【学生の衝撃的な経験とその対応】の4つのカテゴリーで構成された。【患者を尊重できていない学生中心の実習態度】の〔学生の言動が相手を尊重していない〕では〈学生の口調が高齢者に対する言い方ではなかった〉や〈学生は患者に受け持ちを断られたが反省がみられない〉など、患者に対して尊厳ある態度で実習に望めていない学生の様子が語られた。〔学生が自分の計画を優先する〕では、学生として積極的に実習を行う責任については理解しているが、実際には患者より学生の計画を優先しようとしている様子が語られた。〔学生が患者に不必要なことまで聞く〕では〈最初の1日～2日で学生はデータベースシートをうめないといけない〉という実習の目標があり、その目標のために〈学生がまだお互いが知らないようなときに患者にいっぱい話を聞く〉こと等から、〈学生が患者の聞かれないことを聞き、うまくいかなくなると受け持ちを変えた〉経験等が語られた。【学生として真摯に取り組めていない言動】の〔学生のふさわしくない実習態度〕では、〈学生同士でタメ口でしゃべる〉〈学生のやる気が感じられない〉等、実習に対してふさわしい態度で臨んでいない様子が語られた。【患者との間で生じた学生のつらい経験】では、〔学生が患者に怒られる〕経験等が語られた。学生の態度だけが問題となったのではなく、〈何回も学生のケアを受けるよう勧められ患者が怒った〉のように実習場面での指導者や教員・スタッフとの連携がうまく行えなかったことにより、患者にも不愉快な思いをさせてしまった経験が語られた。

表2 臨地実習指導者が認識した倫理的課題

分類	カテゴリー	サブカテゴリー
患者と学生の間での倫理的課題	指導者の患者・家族と学生の間での配慮	学生の実習に対する患者への気遣い 受け持ち依頼時の工夫 学生の実習に対する家族への気遣い 学生の実習目的と患者の状況が合わない現状 受け持ち依頼時の困難さ
	学生に経験をさせたいが患者に負担をかけていること	学生へのケアが患者に負担になっている できるだけ学生がケアできるようにしている 患者がしんどくても学生を受け入れてくれる 複数の学生の受け持ちを頼む 学生にも経験をさせたいが自分が分岐介助したいと思う
	患者と学生両者への配慮	患者と学生との両者への対応の悩み 男子学生の母性実習の難しさ 学生の計画通りにいかない 必要時以外の学生の訪室を断られる 患者の状況に合わせないといけない
に臨地実習指導者の自身	実習指導場面の現実と理想との乖離	指導の自信のなさ 指導者としての自信をなくした経験 指導する側が統一されていない 指導者として裏表があることへの葛藤
	指導者として求められている役割が十分果たせていないこと	指導が適時に行えなかった 実習の調整がうまくいかない 学生は指導者が言うとお納得してしまう 指導が行き届かない 学生の人数が多い 現場の調整だけに終わってしまっている
学生に関する倫理的課題	患者を尊重できていない学生中心の実習態度	学生の言動が相手を尊重していない 学生が自分の計画を優先する 学生が患者に不必要なことまで聞く
	学生として真摯に取り組めていない言動	学生のふさわしくない実習態度 学生なので上手く出来ない 大学卒業後学生のプライドが高い 評価に納得できない学生
	患者との間で生じた学生のつらい経験	患者に断られた時に学生が自分が悪いと思う 学生が患者に怒られる 学生が患者からきつく言われる
	学生の衝撃的な経験とその対応	学生にとって衝撃が強い場面や事象に出会ったこと 学生の衝撃的な経験への思い
スタッフとの関係における倫理的課題	スタッフによっては学生が尊重されていないこと	学生に関心のないスタッフがいる 学生に対して厳しいスタッフへの思い 学生の前でのスタッフのふさわしくない言動 スタッフと指導者の板挟みにあう学生 スタッフ間のもめごとに学生が直面する
	学生実習に対して指導者としてはスタッフに気を遣うこと	スタッフと学生の間での葛藤 スタッフとの連携が不十分 スタッフへの気遣い スタッフと協力していきたい思い 看護業務への負担がくる
教員、他職種との間での倫理的課題	教員との意思疎通が不十分	教員との連携が不十分 教員と指導者の考えの相違 教員との関係で葛藤を感じた経験
	他職種の誠実さが低い言動	医師の誠実さが低い言動 他職種の誠実さが低い言動

#### 4) スタッフとの関係における倫理的課題

スタッフとの関係における倫理的課題は、【スタッフによっては学生が尊重されていないこと】【学生実習に対して指導者としてはスタッフに気を遣うこと】の2つのカテゴリーで構成された。【スタッフによっては学生が尊重されていないこと】の〔学生に関心のないスタッフがいる〕では、〈実習指導者が必死になっても他のスタッフはそんなに学生に関心がない〉と感ずることがあり、指導者の思いと看護スタッフの考えの相違が語られた。〈学生に興味がないスタッフには興味を持ってほしい〉のように看護スタッフにも学生を育てる人材になってほしいことが語られた。〔学生に対して厳しいスタッフへの思い〕として〈スタッフの学生へ教えてあげたいという気持ちが厳しい指導になる〉や〈学生に興味があるスタッフは厳しく言うてしまう〉と語られている。【学生実習に対して指導者としてはスタッフに気を遣うこと】の〔スタッフと学生の間での葛藤〕では、〈スタッフとの兼ね合いが難しくケアもスタッフに任せられず全部抱え込んでいる〉ことや〈指導者としてスタッフとの間での立ち位置を保つのに精神力を使う〉ことが語られた。その際、〔スタッフへの気遣い〕として〈スタッフの看護観もあるので指導者が委縮させてはいけないと思う〉と、スタッフへ配慮する様子が語られた。臨地実習指導者は、〔スタッフと協力していきたい思い〕を持ちながらも、〔スタッフとの連携が不十分〕として〈学生のレディネスをスタッフも理解できておらずズレがある〉ことや、〔看護業務への負担がくる〕と感ずていることが語られた。

#### 5) 教員、他職種との間での倫理的課題

教員、他職種との関係における倫理的課題は、【教員との意思疎通が不十分】【他職種の誠実さがない言動】の2つのカテゴリーで構成された。【教員との意思疎通が不十分】の〔教員との連携が不十分〕では、〈教員もちょうどその時に話を聴いて、患者に足浴を勧めていた〉など、指導者と教員の連携が不十分で結果的に患者に負担をかけた経験が語られた。また、〔教員との関係で葛藤を感じた経験〕として、〈教員が学生の技術について全然把握していない〉ことや、〈教員の求めているレベルが高すぎて全然学生がついて行っていない〉など、学生のことを教員がきちんと把握できていない場合に実習指導していく上で支

障となった経験が語られた。〔他職種の誠実さがない言動〕のように、学生が臨地実習中に関わる看護師以外の職種からも学生が〈理学療法士に嫌がらせされたと学生が言うてきた〉のような経験が語られていた。

## IV. 考 察

### 1. 患者と学生の間での倫理的課題について

学生はまだ看護師免許を持たない教育課程の途中であるが、まず患者の信頼にこたえようとする態度と援助技術は必要である。未熟な技術であることは、患者に善をなし危害を与えないという「善行」の倫理原則（フライ、ジョンストン、2010）に外れることになる。矢野（2012）は、「学生の力は、看護実践力としては未熟であるが、患者の快復に良い影響を与えることも多く、学生に受け持たれて、『患者としての役割』を自覚したとき、患者は『他者のためになっている』と自分らしさ、人間らしさを取り戻すことにつながる。この学びは臨地でなければできない学びである。」と述べており、臨地実習は学生、患者双方にとって有意義なものでなければならない。しかし、看護の初心者である学生にとっては、技術の未熟さに加えて緊張もある。その結果【学生に経験をさせたいが患者に負担をかけていること】のような現状があり、学生が貴重な実習期間中にできるだけ経験させたいという実習指導者としての思いと患者への負担を考えて実習内容を調整している様子が伺える。〔患者がしんどくても学生を受け入れてくれる〕〔複数の学生の受け持ちを頼む〕のように、実習に協力的である患者に、より多くの負担をかけていると感ずている経験であった。指導者としての教育的役割と看護師の立場で患者に気遣いながら実習協力を依頼する臨地実習指導者の特徴的な倫理的課題であると言える。

臨地実習では、学生は学ぶ権利をもつが、学生の学ぶ権利が最優先されるわけではない。そのため、臨地実習指導者は学生と受け持ち患者の間で揺れ動く気持ちがあることを倫理的課題と認識していたと考えられる。〔学生の実習目的と患者の状況が合わない現状〕のように、学校側から提示される実習目的や学ばせたい実習内容と患者の状況が必ずしも一致せず、そのような中で結果的に

実習目的と実際が合わない現状があることが明らかになった。

## 2. 臨地実習指導者自身に関する倫理的課題について

【指導者として求められている役割が十分果たせていないこと】を感じている現状があり、臨地実習指導者は、〔指導が適時に行えなかった〕ことや、〔学生の人数が多い〕〔学生の計画を見る時間がない〕と語った。臨地実習では、臨地実習指導者や看護スタッフなどの人的環境が整っているかどうかは学生の学習効果に影響を及ぼす。学生の人数が多かったり、病棟の業務が多忙であっても実習の期間を変更できるわけではなく、時間的な制約があることは解決が難しい問題であり、臨地実習指導者はこうした制約の中で実習指導をしなければならない状況から倫理的課題が生じていた。これらの時間的な制約や、実習環境から、〈日々の調整だけで終わって学生が見てない項目をやりこなしていく感じがする〉のように、指導者の無力感や不満を感じている現状が推察される。

〔ケアの応用を学生に見せられない〕や〔指導者として裏表があることへの葛藤〕では、実習指導場面で〈たまに横着していることがあるので指導者としてそういうのは学生に見せられない〉と感じたり、〈指導のときには学生にだめと言いながら自分はして裏表があると感じる〉語られた。これらは、ありのままの臨床での現状や普段行っているケアの一部は、学生の前でそのまま見せられないと指導者として感じた現状を正直に語られた内容である。山田、太田（2010）は、看護教員が期待する臨地実習指導者の役割は、「この人を目指したいと学生が思うモデルとなる看護師となる」「プロのケア、本物の看護を見せる役割」「看護の素晴らしさや楽しさを実感させ、学生が看護の道を選んでよかったと思えるような関わり」の役割モデルとなることを期待しているとしている。臨地実習指導者は、モデルとなる看護師であらねばならないという理想と、いつも理想通りにはいかない現実に倫理的課題を感じていることが明らかになった。これは、トンプソン（2004）の医療者が果たすべき義務と責務に関する問題にあたりと考える。

## 3. 学生に関する倫理的課題について

臨地実習指導者は、患者と学生との間を取りもつ立場にあり、【学生として真摯に取り組めていない言動】のように学生の資質や実習態度自体が看護学生として相応しくないことを倫理的課題であると認識していた。菅沼ら（2012）らの研究において、実習指導者が実習中における看護学生の看護倫理面で気になることとして「言葉と態度の課題」では言葉の課題と態度の課題、「質の高い看護の提供の課題」では学習姿勢と学習不足、相手の気配りがなかったことがあったとしている。これらは、今回の研究で抽出された【学生として真摯に取り組めていない言動】と【患者を尊重できていない学生中心の実習態度】のカテゴリーと一致する。臨地実習指導者が短い実習期間で学生の資質や実習態度自体を改善することは困難であることも考えられ、教員と十分話し合い、連携していかなければならない。また、学生が、自分自身の態度が倫理的課題であることを認識できるように指導することが必要であり、臨地実習指導者が担っていく役割であると考えられる。【患者を尊重できていない学生中心の実習態度】の中では、〔学生が患者に不必要なことまで聞く〕や〔学生の言動が相手を尊重していない〕のように、結果的に患者を怒らせてしまったり、学生の受け持ちを途中で断られた経験が語られた。学内では学生は自分のペースで勉強することができるが、臨地実習では何よりも患者が中心であることを求められる。臨地実習指導者として患者に害を与える可能性のある学生の行動に対し、患者を守る立場で倫理的課題を感じていた。また、【患者との間で生じた学生のつらい経験】では、〔学生が患者に怒られる〕〔学生が患者からきつく言われる〕の経験が含まれていた。患者の身体的・精神的状況は日々変化することも考えられるため、必ずしも学生の関わりに問題があるわけではないと考える。そのため、学生がなぜ患者に怒られたりきつく言われたのかを理解できるようあらゆる要因を考え、その状況をアセスメントできるような関わりが必要である。臨地実習では学生は様々な経験の中で成長していくものであるが、〔学生の衝撃的な経験への思い〕の中で、今後看護師になることへの迷いが出たり、看護観に影響を与えてしまうのではないかと感じることもあると語られていた。学生のつらい経験や衝撃的な経験を臨地実習

指導者が適時に捉え、対応していくことの必要性和難しさがあることが考えられる。

#### 4. スタッフとの関係における倫理的課題について

【スタッフによっては学生が尊重されていないこと】のカテゴリーには、〔学生に対して厳しいスタッフへの思い〕だけではなく〔学生に関心のないスタッフがいる〕というサブカテゴリーが含まれている。これらは、学生が尊重されていないことに対して後輩を育てる立場で、臨地実習指導者として認識した倫理的課題であると考えられる。税所ら（2014）の臨地実習指導の役割をもたない病棟看護師を対象にした研究では、病棟看護師は実習指導で不安や困難感を感じ自分の指導を反省していた。そのため実習指導者は、学生から病棟看護師に対するポジティブな意見を積極的に収集し、病棟看護師にフィードバックし、さらなる役割モデルとして意識付けができるよう努める必要があるとしている。臨地実習指導者は今後の後輩指導や臨地実習指導を行っていく人材の育成も担っていると考えると、スタッフにどのように臨地実習に協力を求め、関心を持ってもらうかということは臨地実習指導者にとって重要な役割であると言える。【学生実習に対して指導者としてはスタッフに気を遣うこと】として、学生の実習に関わるスタッフの言動を尊重しなくてはならないと考える一方で、臨地実習指導者とスタッフがうまく連携できないで悩む経験や、スタッフとの臨地実習に対する意識の相違で臨地実習指導者は日々気を遣っていることが分かる。臨地実習指導者は、学生や患者の「自律」を守ると同時に、スタッフの「自律」を害さないよう行動する必要性を倫理的課題として認識していたと考える。

#### 5. 教員、他職種との間での倫理的課題について

【教員との意思疎通が不十分】においては、〔教員との連携が不十分〕であることにより、教員や臨地実習指導者、スタッフなど複数の方が患者に同じケアを何度も勧めていた経験が語られた。学生が受け持つ患者には、当日の担当看護師、臨地実習指導者、学生、教員と学生の受け持ちいない患者より多くの関わりがあり、連携が不十分であると結果的に患者に負担を強いることになる。教

員と臨地実習指導者がうまく連携できないことは、効果的に実習できないだけでなく患者に害となる可能性があると考えられ、臨地実習指導者が患者に関わる複数の人を調整し連携する必要性があり、お互いがコミュニケーションを図り率直な意見交換をすることが必要であると考えられる。しかし、高畑ら（2015）の研究において、関係性構築の為に教員、指導者双方で十分に話し合う場や時間を持つことは重要だと認識しているが、教員は見解の一致が図れず時に越えられない壁があると感じ、一方、指導者は大学側の方針や姿勢に違和感や葛藤を抱くが、やむなく要求を呑み、大学側に同調している現状があったとしている。教員と臨地実習指導者の関係性の構築の困難さを理解した上で、より良い実習指導の為にどう協働していくかは、今後の重要な課題である。〔医師の誠実さが言動〕では、医師の患者に対する言動が不適切であったり、学生がそのような言動を聞いて〔学生たちに衝撃的なことを言うと医師の悪い印象を植え付けてしまう〕と感じていた。患者を中心とした医療を行う専門職として、倫理的課題について多職種を交えて検討していくことの重要性が示唆された。

#### 6. 研究の限界と今後の課題

本研究は臨地実習指導者がA県内だけであり、教育課程等は考慮せず対象者を選定している。教育背景、経験によって倫理的課題の認識に違いがあることが推察されるので、10名のインタビューの結果のみで臨地実習指導者の倫理的課題の認識と対処として一般化するのは難しい。また、今回は研究対象者の所属施設の設置主体や看護配置、実習受け入れ校などの組織の状況を考慮していないため、この点は研究の限界である。臨地実習指導者が経験した倫理的課題は全て倫理原則に関わっており、今後は臨地実習指導者自身が倫理に関する教育や研修をどのように受けてきたか、臨地実習指導者研修の受講の影響について、倫理的課題への関心・認識等も合わせて調査し、支援体制や倫理教育のあり方についても考えていきたい。

## V. 結論

1. 臨地実習指導場面で臨地実習指導者がどのよ

うな倫理的課題を認識しているのかを明らかにすることを目的に臨地実習指導者10名を対象に調査した結果、13のカテゴリーが抽出された。また、カテゴリーは倫理的課題が生じた状況と人との関連性から、5つに分類できた。

2. 学校側から提示される実習目的や学ばせたい実習内容と患者の状況が必ずしも一致せず、実習目的と実際が合わない現状があることが明らかになり、臨地実習指導者は、学生と受け持ち患者の間で揺れ動く気持ちがあることを倫理的課題と認識していた。
3. 臨地実習指導者として、モデルとなる看護師であらねばならないという理想と、いつも理想通りにはいかない現実に倫理的課題を感じていることが明らかになった。

## 謝 辞

本研究にご協力頂きました臨地実習指導者の皆様、および看護部責任者の皆様に感謝申し上げます。研究をすすめるにあたりご指導をいただきました諸先生方に深く感謝いたします。

## 付 記

本研究は、2016年度聖泉大学大学院看護学研究科における修士学位論文の一部に加筆修正したものであり、その一部は日本看護学教育学会第27回学術集会において発表した。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 文 献

- 細田泰子, 山口明子. (2004): 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因, 日本看護研究学会雑誌, 27 (2), 67-75.
- 石崎邦代, 池田正子. (2007). 臨地実習指導者がかかえている指導上の困難とその支援—実習指導者のアンケート調査より—, 日本看護学会論文集 看護教育, 35, 228-230.
- 岩崎真子, 梶谷佳子. (2019): 看護学部3回生の捉える看護における倫理的課題と倫理的判断, 京都橘大

- 学研究紀要, 45, 133-147.
- 中村裕美, 志自岐康子. (2006): 手術看護における倫理的課題, 日本科学保健学会誌, 8 (4), 210-219.
- 日本看護協会. (2003): 看護者の倫理綱領, <http://www.nurse.or.jp//nursing/practice/rinri.pdf>, [検索日2017年9月6日]
- 小野光美, 浅井さおり, 原祥子, 他. (2005): 老年看護学実習における倫理的課題に関する学習内容の分析, 神戸市看護大学紀要, 9, 75-84.
- 税所三智, 平見愛, 木虎聡美, 他. (2014): 臨地実習指導者の役割を持たない病棟看護師が実習指導において抱く思いや経験—実習指導者としての支援の検討—, 日本看護学会論文集 看護教育, 44, 149-152.
- サラ T. フライ, メガン-ジェーン・ジョンストン. (2010). 片田範子, 山本あい子 (訳), 看護実践の倫理 第3版, 28-33, 日本看護協会出版社, 東京.
- 菅沼澄江, 根岸京子, 高野公子. (2012): 看護学生の臨地実習における看護倫理場面での指導の現状—臨地実習指導者の立場から—, 2 (1), 66-73.
- 菅原スミ, 俵積田ゆかり, 田中千鶴子, 他. (2012): 看護師の倫理的ジレンマの経験状況と対処行動, 昭和大学保健医療学会誌, 9, 113-119.
- 高畑和恵, 佐々木吉子, 井上智子. (2015): 看護学士課程教育における臨地実習指導での大学教員と実習指導者との協働に関する研究, 日本看護学教育学会誌, 25, 1-13.
- ジョイス E. トンプソン, ヘンリー O. トンプソン (2004). ケイコ・イマイ・キシ, 竹内博明監 (訳), 看護倫理のための意思決定の10のステップ, 121-128, 日本看護協会出版社, 東京.
- 植村由美子, 大島弓子. (2016): 過去10年間の看護学実習における看護倫理に関する文献検討, 豊橋創造大学紀要, 20, 35-45, .
- 山田道子. (2016): 看護倫理の教育的関わりに関する研究 臨床実習指導者役割モデルの検討. 神奈川県立保健福祉大学教育実践センター 看護教育研究収録, 31 (3), 212-219.
- 山田聡子, 太田勝正. (2010): 看護教員が期待する臨地実習指導者の役割—フォーカスグループインタビューに基づく検討—, 日本看護学教育学会誌, 20 (2), 1-11.
- 矢野章永. (2012): 臨地実習指導者実践ガイド, 8-9, 医歯薬出版株式会社, 東京.

